

# 地中海

*MARE MEDITERRANEUM*

2019.11



令和元年11月1日発行(毎月1回1日発行)第67巻第11号 No.738

## 創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の郷愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しまた北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

# 地中海

二〇一九年十一月号(通卷七二八号)

◇今月の二十首詠……風のゆく道 岩井久美子 2

■作品A 高尾恭子・高津砂千子他 4

A 高取尚子他 20

B 富岡明子他 52

C 出口和子他 66

A 泉嘉穂子他 80

■オリーブ集 西田江美子・根岸 亮他 44

◇今月の二人 上原ケイ子・坂本佐和子 16

香川進の生きものの歌 田土成彦 14

宮終二と香川進 久我田鶴子 15

■佐久間ミツ子歌集『こころの扉』批評 磯田ひさ子 38

オムレツの程よき焼きあがり 磯田ひさ子

人生の実り もとむらしげと

私と短歌の出会い(207) 三田享子 19

◇シルクロード・カフェ——【責任編集】木村文子 42

■歌壇月旦 藤田美智子 51

確かな日本語の力を

■遊覧香港 〈蕩児を乗せて〉 石田明彦 50

第一歌集の頃 村上 旭・佐川久光・酒井 牧・伊東ミイ子 96

■九月号作品批評 72

A……松浦禎子・大浪美雪

柴田登志恵・庄司菊枝

B……田土才恵・西堤啓子

C……金澤孝一

オリーブ集……中島阿津子

今月の二人・作品評 久我田鶴子 18

最近の歌誌より [編集部] 71

報告・藤田美智子歌集『徒長枝』出版祝賀と読む会 江尻リエ子 65

支社・グループ掲示板 (宙の会) 田土才恵 64

クリップ……98 神田通信……表3

(表紙デザイン) Tazuko Kyoga

## 風のゆく道

岩井久美子

やぶ椿の花一つ落つ切り岸の上の茂みに鳥の声する

このメールどれに届くか電波塔緑の山にいく本も立つ

次次と横一文字に山の木のゆれるを見たり風のゆく道

もぎたての大きトマトの形よし上がりかまちに一つ置かれて

アスファルトに小さき蛇のつぶれおり鳥二羽がついばみ去らず

うす紅のおいらん草に黒揚羽いくたびも寄る夏の夕ぐれ

七月の夜ふけにひとり立つ川辺遅れて羽化する蛍いてほし

裏庭の茗荷のかけに消えていくはぐるとんぼのただようがごと

昭和二十六年生まれ。  
昭和五十八年地中海入会（青嵐グループ）、  
平成二十六年より昴グループ所属。  
歌集に「峠のうた」がある。

幼子の爪先ほどの土蛙長き尾のあり畑に動く

靴下に小さき穴の一つあり人には言えぬ悲しみのごと

山すそをゆく車なく薄暗き外灯ひとつ水田に映る

折り返しの次の電車を待つ間ホームに立つ人は無言に

ホームなきレールがあまた並ぶ駅とどこころに夏草の立つ

レース編のようなる月が空にあり夏の夕暮れ長く明るし

一つ家の屋根より高き百日紅白き花ゆれ山陰りゆく

トンネルを抜けるまぎわの山と空半円形のつかのまの夢

夏真昼峠の家の庭先にくれないしたたる凌霄花

幾たびもブレーキを踏む峠道青田の中に町が見えくる

ブラインドのすき間より見る坂道途切れ途切れに車の走る

制服の学生二人の指定席カフェコーナーの片隅の席

# 作品 A

高尾 恭子

母と暮らす

・大

滝田 靖子

八月

・新

外来の朝はいびつな五角形ひとり黙せりヒジャブの女

わたくしを私以上に知りつくす診察券のICチップ

すこしずつ母が記号になっていく今日の血圧食欲人格

この母はどんな戒名えらぶだろう昼餉はいつもの天ざる小盛

生き死にをドアのむこうに封じこむゴーギャンもどきのロビーの壁画

日曜の病棟は観客のいない劇エスカレーターを気取っておりる

特記事項はシャインマスカットの滴りとぶるんぶるんの赤児のほっぺ

高津 砂千子

太陽

・風

わが背丈越えてひまわりまだ咲かぬ目指すは太陽ぐんぐんと伸ぶ

マスカットひとふさ水に浸しゆく翡翠の色に指も染まるや

大きすぎる庭の胡瓜は酢の物に おさなき頃の味思い出す

八日目の蝉か車道をよたよたと動いておりぬ猛暑のま昼

夕つかた百日紅の花おもり門をくぐれる右肩に触る

八月の末日野球を観戦す 勝ち投手九里にあがるどよめき

あさがおの水色三つ四つひらきたり秋を迎うる透きとおる色

つかの間の自由命がけの自由夏草の上を黒揚羽舞ふ

深い深い日常の孤独告げたくて告げ得ぬ言の葉苦く噛み締む

傷付けると知りつつ放つ言の葉の跳ね返りきつとわれを苛む

自らの稚拙な正義を振りかざし誰を傷付け終はる八月

エアコンの下にマスクをして眠る贅沢でかくも愚かしい夏

日に三度風邪薬を飲み終日をうつらうつらと過ごしてしまふ

身の内にぎつしりと死が降り積もる患者十人逝きし八月

竹下 妙子

秋の夕べ

・霧

蝶一つ渡る山脈やまなみ此岸より彼岸のあはひ一筋の道

ゆきくれて秋の川原に佇めば夏の白蝶姿を見ざる

さ庭辺の朝の陽射しにきらきらと椿の葉裏光りてゐたり

曼珠沙華ひと群燃えて陽のつよし赤・死の花かこころ揺れをり

ヒツジ草根なく漂ふ白一花夕べに閉ぢる吾とぞ思ふ

夕されば空にうまるる満天の吾が歎座は南中にあり

プラタナス葉群を鳴らしゆく風の遊びを聞きつつひと日終りぬ

田土成彦

スコール

・宙

キュリオシティのような孤独もいいもんだ火星を一人占めのさすらひ  
終電車おと軽やかに過ぎゆきぬ忘れておしまいケロケロケロリ  
思ひ切り百冊の本を処分する買つて読まないものも交へて  
断捨離といふほどならず湯飲み茶碗三客小皿四枚の廃棄  
スコールを棄つばの傘に凌ぎつつ素顔の森の人のくつろぎ  
LEDの寿命四万時間とかこやつはわれより長生きをする  
電子辞書の国語辞典の三冊を見比べ選ぶ一つ言葉

田土才恵

i pad

・宙

孫五人背丈はゆうにわれを超えこの夏休み嵩だかきこと  
わが背丈超え来しなれど幼さはいまだと思ふ年子の孫ら  
一人居に操作進まず馴れぬままスマホ片手に用なさずおり  
離れ住む子が置き行きし i pad 手探りたれど前に進まず  
行き詰まり挙げ句の果ては電源を切るほかはなしこの i pad  
オン・オフの世界は二度押し元に戻るあっけらんを孫に教わる  
ふるさとのいちじく根付きこの夏は熱れ実楽しむまで育てり

玉井綾子

余裕

・羊

占いのお助けアクション「信号を待ってみよう」を炎天にする  
猛暑日の街の余裕や家々の壁にかけられる青色ホース  
真夏日の午後水まきに水やりに青きホースに筋肉のつく  
東京から旅した先の「しまむら」で日常を買う子育て世代  
三世代同居になれば朝の子の具合の悪さを子目線で見る  
プラごみも古紙もさっくり燃えるゴミわが分別に垂れよ蜘蛛の糸  
親、仕事、健康、お金 アラフィフの半生のツケに埋まる外堀

虎谷信子

入院

・伴

あちこちを災ひ 入院さびしきに、「山のおなた」の詩 口ずさむ  
検査・検査 がう音に耐へよこたはる、無念無想を 保たむとして  
日に六回採血のあと 哀れとも、手のかふのシミ かなか消えず  
病院の長き廊下 夜更けなば、しん閑として もののけ出さう  
寺院に居並ぶ地藏 新しき前かけ そろひてのお供 白し  
化粧地藏 笑まふ相なれ子供らに、お供物あまたお下りいたたく  
塚の辺の一基の地藏 いつの世から 居ますと思ひつ。供花は草花

中島央子

三連音符

・森

下野へ目指す車窓にひろこれる田の面の縁瑞穂のみどり  
うつつなる人の匂ひのなき下小代駅に黄色の腰掛三つ  
この日頃怠惰なわれは二宮尊徳の手植糸の松を見上げてゐたり  
河骨は三寸ほどの莖立たすせせらぎの中の三連音符  
絶滅の危ぶまれるる河骨の黄の花弁蕊の朱色は  
渾身のちからに映ける河骨の手入れ脈はぬ女のうしろ背  
わが乗れる車に白鷺とび立ちぬ青き青き田の上高く

中島義雄

初秋

・岡

道のべの野苺の実を取りて勤め君の言葉の骨抜きをする  
暮れ暮れの葉陰にやうやく探り当てし無花果は己れの香りを持たず  
シーラカンスと見られるむ眼を知らぬげに卓のかき餅音立てて食む  
花籃お好み焼きに踊りつつ君へ一首の返歌が成らぬ  
これを飲まぬ奴の歌など知れたものと我に注がせしビールを煽る  
ふとさむき懐ひは何ぞ秋立てる気配にひびく野の鳥のこゑ  
荒れし田のうへをさまよふ鷺白く農の未来へそそぐ光なし

## 永塚節子 蟬

・銀

ふふふふまた頬弛みふふふ何ごともなき検査結果に  
車窓より見上げる箱根の峰々のいや高くして頼もしきかな  
ことなきに心ゆるめる夜の道左の足首ぐりりとひねる  
体温を越える気温に何をする力の湧かずあぶらぜみ鳴く  
せみの声はたと止みたる静けさは真昼の虚ろ真白き不安  
台風のならの風にゆれゆれる木の葉をしかと蟬のぬげがら  
ひと夏を鳴ききりたるやあぶらぜみゆっくりゆくり道を過る

## 萩 葉子

茉莉花

・銀

小松葉の種子がはじけた雨模様 一人の声近付いてくる  
庭にきていた野鳥一羽茗荷の根元をクッククック  
細い草がたちまち伸びて胸の高さに届きそうなり二百十日近く  
等分に切りそろえたそうめんに氷散らして夏をのりきる  
コットンに化粧水たっぷりふくませて暑さをたたいている  
丸ノ内南口にて待ち合わせ十年ぶりのひとり交じえて  
夕の風待ちて水やる茉莉花に今年も咲いた紫香る

## 白子 れい

千日詣り

・洛

梅雨明けを待ってましたとシャンシャン蟬がお詣りの背押しくるる  
藤棚の下影に佇ち受け付け待つ清水寺の千日詣り  
清水寺の舞台は今も工事中みおろす緑の眺めふかきも  
年に一度公開さるる御仏に南無なむ南無とこころ預くる  
御仏のみ前に佇ちて掌を合わすこのひと時にゆめの膨らむ  
今年また千日詣り果たし終え安らぐこころにお札いたたく  
百日紅木槿に芙蓉高砂百合咲き競う庭わが家華やぐ

## ばばりょうこ

赤シャツの男

・鹿

三階の病窓に向けて手を振らるる赤シャツの男の心なるエル  
金柑の木に花が咲く星くずのようななるかたちきらめいたり  
雑草の花のいのちのいとおしく立ち去りがたきしばしのあいだ  
図鑑にて花の名さがせと見当らずゴメンねと呟く夕つ光のなか  
朝夕に言葉がけさるるE主治医の背にクマのプーサンを見る  
ふいというにはあまりにもふい讃美歌の第百五十九くちずさみいたり  
生来の遊び心に救われるわが人生は母の遺産と

## 浜谷 久子

声

・地

わっしょいの掛け声ひとつに福島の信夫通りは五十年目を  
ひとすじの道へ続けと「わっしょい」の声のきわまり祈りとなって  
大草鞋傾けられて観客の目の前すばやく藁の抜かれる  
「わらのわ」の激しく振られ跳ね踊る納めの時は一団ごとに  
わらじ祭り踊り果てても終わらない笛と太鼓のここぞと響く  
目は指揮の袍をとらえて笛太鼓力のかぎり祈りますく  
指揮の袍終わりを告げる一振りに瞬時の静けさ笛と太鼓の

## 浜本 芙美

つゆくさ

・夢

つゆくさのひと花見たる庭の隅そこより私の秋のはじまり  
日課のごと夫が買物にゆきしあと雷注意報、空暗れ渡る  
すこやかな彼の日の面わ抱くゆえ病床訪うこと敢えてなさざる  
摒ぎわの花ゆれやさしき百日紅人の住みいしままのくれない  
海の温暖化が台風つくるメカニズム映像にて知りぬ岸を打つ波  
台風の難をのがるこの讃岐お大師様のおわしますかも  
キッチン洗い桶に水満たし置く常の心得古人に見倣う



楢垣美保子 雨

・昴

今朝ひとつアザレア椿の赤き花 わが子をほめること愛するはは  
ことどもの帰り待つ夜灯籠に灯を点さんとはは言いて立つ  
広島の路面電車に恋したる孫らし降りると言えば泣きべそ  
窓ガラス一枚にして無音なりドラセナの葉のこきざみに揺れ  
雨音をけちらすように雨音にはりつくようにおさなごの泣く  
雨三日降りつづき止む朝のことわが庭に秋のしじみ蝶飛ぶ  
棚に置くアンモナイト砂の薔薇白きろうそくなじむ秋なり

福田庸子

森の息

・今

亡き師二人の笑顔浮かべて歩みくれば水に直立つ河骨の花  
重なりて葉はひたすらに身をほどく水の流れに河骨の花  
水底をおほひつくして葉を生さむ下野河骨夏迎へたり  
しめりたる夜の大気をふくらませ森より届く樹樹たちの息  
風に乗る盆歌届く夕まぐれ遠く速き日は勢ひありし  
光濃く夕立の日日に勢ふか桑の木生れて枝伸ばしゆく  
桑の葉の濃き色しみる眼裏を亡夫ゆきすぎぬ夏の幻

藤田美智子

魔法のランプ

・新

稲の匂ひに胸は満たされぬならむ背田のうへを飛べる白鷺  
くもの巣の一本めは風がかけるといふ巣になることは知らずに過ぎて  
待ちゐたる言葉のかへりこぬままに熟れたる桃が匂ひを放つ  
夢のなかみは目覚めとともに消えにけり必死に逃げてゐただけれど  
若者が(来ないで明日)と歌つてる わたしがどこかに置いてきた明日  
わかるけどの(けど)はいらない わかつてくれたと思へないから  
民の声を聞かうとしないリーダーに魔法のランプを渡しちやいけ

藤森巳行

断捨離

・銀

死んだあとが大変だからと我が娘三泊四日で断捨離に来る  
シャツ掲げ「着るの着ないの」両親に厳しく断捨離迫る娘は  
断捨離も楽しかりけり写真整理ミニスカートの妻が出てくる  
丈夫なる足を晒して写真うつる妻の勇氣にかんしんをする  
断捨離とはかういふものか我が部屋が新築当時の姿に戻る  
死ぬ準備一つ終へたり四日かけ断捨離済ませ熱き茶を飲む  
今度また点検に来ると言ひ残し断捨離終へて娘は帰るぬ

船田清子

八月の蟬

・天

シャーシャーと朝は目覚し日の暮れはジュジュと一日の疲れを焦がす  
ここ数年絶えて聞かざる油蟬立秋過ぎの日暮をジィジィー  
数年前授かりし命や油蟬ただ一匹の頻き鳴く日暮  
孟蘭盆も過ぎて熊蟬の声ほそり秋はおもむるに來たるといふに  
値も柄もみな氣に入らぬ 若き日のTシャツ取り出し華やきてみむ  
連日の炎暑に枯れにし木々の末台風の雨にさみどりを吹く  
八月の六日・九日に核兵器廃絶に触れぬ挨拶 いか

牧雄彦

ひめゆりの塔

・大

とつづくの観光客の多くゐる歓声をあげ写真撮りあふ  
大人らの始めし戦に巻きこまれ多く乙女子この地に死にき  
幼子も老いも死にたり戦ひのさま知るほどに何への怒りや  
ふつふつと噴き出す怒りを抑へかね風きたる海に向かひて行てり  
戦跡を訪ねて帰るバスの中言葉あらく目をつぶりある  
那覇の街掘れば人骨出でしとふその土の上ピルそびえ立つ  
邑子のうた思ひつつ見るこの広き米軍基地は日本にあらず

松浦 禎子

光のゆくえ

・羊

須賀敦子いくたび通い見つめたる「マツテオの召命」光と闇の  
カラバッチョの絵の幾枚を納めたる教会を今しずかに訪う  
わたくしもカラバッチョの絵を目の前にサン・ルイジ・ディフランチェージ教会  
コインを入れ灯のともる間に目をこらす右手より射す光のゆくえ  
卓上に銭をかぞうる男の手その醜きを自画像として  
ロレートの聖母を仰ぎひざまずく農夫の一途 画家自らの

人あやめしカラバッチョにして画き得しか「ロレートの聖母」農夫の足裏

松永 智子

空

・嵐

ああとはい仰ぎみる空 雲のなく月のなくしてただただとほし  
語りつつ月みることの絶えてなしいまのほりくる十七夜の月  
月の出を待つにあらぬにこのままのねむりに入るをふとためらひぬ  
なにもなくなにもなき夜ビルの上に十七夜の月ただのほりくる  
仰ぎみる空とほくして闇ふかしビル十階にゆきかふ人影  
夜ふかくあかあかともる灯の窓にうごくひとらの影ありて見る  
ことばなく月仰ぎみるこの夜の空とほくしてふかしあまりに

三浦 好博

雑感

・眺

八ヶ月今年も過ぎて振り向かぬ日記に明日以降の空白  
年金と同額の株の配当のありて義弟はアベ・ユージェント

「住む世界違ひ過ぎるね」「いや、かうして水盛屋にて話し合つてる」

シンゾーの思ひが形になりて来て「表現の不自由展」中止

頬被りの爺さん頭巾の山姥と公園に来て草引き草刈る

朝霧の晴れこし風の松島に上りて来る「印象日の出」

許せない笑ひと思ふフクシマを「まだ言つてるよ」「また言つてるよ」

宮本 靖彦

墓参り

・凌

渋滞の明石海峡橋下に漁船三艘水脈蒼あをし  
津名志筑と父祖の地洲本にちかづけば茅渚の海原竊なしせまる  
ちぬの海と雲のはさまに望めるは金剛葛城紀伊の山山  
祖の仕へし洲本の天守をふりあふく狭きこの地に付度かさね  
教員の職捨て神戸に來しといふ明治の祖父の心を想ふ  
この墓に眠る縁者のだれよりも長く生かさるありがたきかな  
御食国淡路洲本の町おこし委員のつくるカレーの旨し

三好 聖三

無意味

・伊

とら猫が軽くくしゃみをする画像(MAP)がはつか色を添えたり  
くれないの少女がふいに顔をあげ「左右いずれもトンマ」とぞ言う  
餌を喰えばささと消えてゆく野良猫にうすももいろの肛門がある  
散歩とは目途を捨てて歩くことオークタウンの銀杏の匂い

「いまさらなんの吉本か」インテリ女子が偉そうに言う

獅子唐を噛めば爆発する辛さ家族ともども唸る夕ぐれ

獅子唐は中国生まれ北京柿椒「純粹日本」ってどれほどあるか

御代田 澄江

夏草

・茨

窓開くれば夏草著く匂ひ来ぬチェンソーの音朝より響く  
梅雨闇に覆はれあくまで暗き空長雨の恐怖兆すにあらむや

「逃げて下さい」声嘎らしても逃げぬ人いかんせん涯崩るるまでも

梅雨明けは今日宣言か黒揚羽飛び来て柚子の葉に触れゆきぬ

様々の病持ち人等様々に生くる術探す人世愛しあ

空蟬の見えぬ目の如障りあり病は詠まぬと決めてをりしに

底ごもる冷房の音止みし間に雀らの声呀えええ聞こゆ

## 茂木 斌

横山竜胆

・埼

いつの間に背のザックに油蟬家に入れば壁に飛び鳴きたす  
山の日も山へは行かず甲子園高校野球に暑き忘るる

大雪山にのみ咲くといふ恋ひながらまだ見ぬ花の横山竜胆  
令の字を四角に囲む箇の字あり字義は皆さま辞書当たられよ  
たかだかと入道雲の湧きたてる笠山に今日は九十五回目  
山みちに金みづひきを珍しと見し日もはるかいま庭に咲く  
年重ねさうだと思ふ生きてゐるこの世はあの世のためにあるのだ

## もとむらしげと

屋久の海

・そ

屋久島の尾根より望む朝焼けの雲に隠れて日は昇りけり  
廃船のごとくに見ゆる一艘の船を浮かべて海に日が射す  
ちぎれ雲浮かべる島の沖とおく水平線をゆく船のみゆ  
沖をゆく船影のあり雲のみが動きて船はとどまる如し  
昇りくる朝日が照らすちぎれ雲山の暗さの更に際だつ  
昇る日のそこより明るむ空の上雲を浮かべて無限の広さ  
雲かかる屋久島の海あかるみて沖に種子島の低き島影

## 八乙女由朗

石の端

・柴

法師蟬が二十五回目に啼きかわり秋は来たれり台風連れて  
単純にごく単純に老いおれど老は鈍しとムチ打てるなり  
百万遍数珠にすがりて何せんか夏の時間を無為に過ごして  
数珠玉の一つ一つに映りいる影が見ゆるや縁の顔が

蝶も蜂も空中高く飛びゆけり命にかかわる時なればとて  
少しでも少しでもなり石の端腰を下ろして安堵せんとす  
バナナ食うを勧めし医師が通いたる近道なりきこの田圃道

## 山下 雅子

ひまわり

・習

ミニひまわりされどひまわり「夕暮」の知らぬ令和の日のひかり浴ぶ  
人住まぬ家に象徴のごとくあり深き洞もつ白樺一樹  
ゴーヤ料理のお裾分けあり挽き立てと添書ありて縁がおどる  
ピーマンの肉たっぶり詰め「ひまこ作」くりくり腫と小さき手浮かぶ  
土用の丑にとどく好物病み上がりにあつくしみ入る孫の心根  
腰丸き老女と青年リハビリ士の腕組むカッパル歩むまなうら  
雨上がりふつと町へ出てみよう半年ぶりに味わう自由

## 横田 敏子

九月の雨

・福

眉少しきりりと描きぬ朝鏡今日の暑さをいざ乗り切らん  
会うたびに暑いねと言え返りくる「暑いね」「暑いね」木霊のように  
日傘さして行く町並のおちこちに百日紅咲けりたわわに咲けり  
速き日にやさしく蝉を包みたる手の感触をいまだ忘れず  
パラパラとふいの夕立通りすぎ心に小さな水たまり生る  
葉ざくらは九月の雨に打たれつついまなお深き緑を保つ  
真っ白な画用紙の前「好きな絵をどうぞ」と急に言われたけれど

## 吉永 惟昭

九月

・熊

蛇口より踊り出てくる火の国の水が冷たい防災の朝  
秋分のおはきは哀し山本の友一師徳ぶ滄浪の歌

二の岳に釣瓶落しの陽が沈む九月となれり多文人忌  
逍空忌詩歌降り来たれ夕暮の漣しなき道向日葵のうた  
新たにまた生れ変わるべし牧水忌くぐもる米寿杖つきて佇つ  
糸瓜忌に道後訪ねき 歌垣の友みな鬼籍に入り給いたり  
老の日か 欠けざりわれの兄姉四人合わせて三百七十八歳

## 磯田ひさ子 糸瓜

・森

乾きたる糸瓜のまろぶ土間に坐し老いはひねもす東子なはしを作る  
 孫や子に小遣こづかいひをやるほまちにと糸瓜の東子なはしを老いは作りぬ  
 実がなれば苦土くつちを与へよといふくんだり昭和はじめの園芸書にあり  
 マグネシアを苦土くつちといふことさら紙の園芸の本にはじめて知りぬ  
 へチマ水のうすき緑の化粧水大正生れの母の使ひき  
 生きてゐる証の墓参ふるさとは畑はたけのもの競かひ青田広ひろごる  
 木のみどり水のしろがね土の埴はにいまに交まらぬふるさとの色

## 市原志郎 午後

・萬

もう歌も詠めなくなると思いおり文字書くことのスムーズならねば  
 梅雨の間に又も近くに家が建つ大きな材木運ばれて行く  
 整わぬ我が文字悲し夕ぐるる窓辺に日記つけない時に  
 預りている子犬の仕種にて癒されてる午後ごごのひととき  
 終わりたるスポーツ番組その中にしばらく居たり夕ぐれとなる  
 ため息をつきつ午後ごごのひとときをテレビをつけて慰めている  
 女房の買い物に出し空洞にテレビの音のみ響ひびきていたり

## 市原やよひ

燕狂想曲

・萬

口開ける子燕にとんぼつこんで又飛び立てる親燕あり  
 騒さわぎ立つ燕の巢ねの下羽取れしとんぼ落ちてあわれなりけり  
 雨の中巢より落ちたる子燕を家の中に一晚泊める  
 巢の下に戻しやりたり子燕に餌やる親を目撃したり  
 顔出せば急ぎ逃げ行く親燕こちらも急ぎドアを閉めたり  
 巢立たねば巢立たぬなりに案じおり子つばめすでに親と見紛う  
 今朝早く巢立ち行きしかつばめ達安堵寂さびしさこもこも湧なきて

## 大浪美雪

下野河骨

・森

浅草の雷門よりはたがみ多き下野にいざや出発  
 出迎えは今市支社のお三人と間近に鳴けるホトトギス一羽  
 大谷石の長屋門もつ行川庵ゆがみたるガラスに古きを遣せり  
 蹊せきの深さの小さき流れなり花のみのぞくシモツケコウホネ  
 思いのほか莖こゝろたくして小さき花シモツケコウホネ流れに揺るる  
 生れたてのあきつあきつの群か線せんなして高曇りの空にとけこむ  
 日光の山山を背に広ひろされる青田の上をつばめ飛び交う

## 奥田清和

雪どけ水

・大

家いへ内に文鳥はなちゑがほしてむかへくれたり京の歌びと  
 トンボ採りし兄もいくさに果てしのみ煉瓦のあはひに日は沈みゆく  
 兄と来し中学野球の発祥の球場跡に尾花なびけり  
 なじみぬし法善寺横丁丹吾亭名をつらねるし文人いかに  
 校庭に深く沈めて大砲に再起誓ひし浮世の事実  
 ミサイルの懸念もあらず曲り水の豊ゆたかのあかりの盞たんくみし  
 人は人我はわれぞと思へども雪どけ水の行く末知らず

## 奥田陽子

木の実

・羊

川岸の乏しき土に根を張れる藪萱草の花かかげたり  
 梅雨の雨やまざる時をはるかなる灯となりて朱紅花の咲く  
 昼暗き梅雨の川岸灯のごとき花を今年も見て過ぎゆかん  
 歩みゆく樹樹のなかよりつきつきに蟬飛びたちて山迫りきぬ  
 山道に拳こぶしがる声あり見あげれば夏の勇氣をくれる鬼百合  
 紅葉にいまだも早き樹樹のなか百日紅一木炎えさかんなり  
 幼より掛かりし電話にまっ先に拾ひろいし青き木の実を言えり

## 小野雅子 長寿

・羊

地震<sup>ゆゑ</sup>ふりて案ずる人の今はなく人ゐてこそ土地なりと知る  
 「死<sup>し</sup>「適齡期<sup>とくねい</sup>」といつも言ひつづ百歳<sup>ひゃくさい</sup>までを鶴岡の地に師の生きてこし  
 今のわれの年齢<sup>と</sup>なりし師よ夏衣黒き和服のすずしげなりき  
 不安げな顔の幼児でありしとふ七十年も昔のわれは  
 「ホーム」とは老人ホームのことであり解釈ちがひ短歌<sup>たんか</sup>よみ直す  
 えりあしに白髪の見ゆる監督の率るチーム勝を重ねる  
 たつぷりと水を撒かれしグラウンドが白みを帯びて試合はすすむ

## 菊岡栄子 命をつなく

・漣

梅雨明けてにわか酷暑の訪れる病の身には辛さの募る  
 例年になく猛暑日が長引きて口に合うもの少なくなりぬ  
 体調の優れざる日の三度の食事喉の通りの悪くなりたり  
 施設にて出でくる食の口に合わずそのまま返すことの多かり  
 嘗てハーブ料理教室持ちし身の口に合わぬを悔しと思ふ  
 好みたる適温のもの口に出来ずままにはならぬことの連続  
 何くれと夫の届けてくれる食に細々命をつなく毎日

## 菊地栄子 かなかな

・湾

土砂降りの雨に翼を打たせつつ野鳥はしきりに濁声<sup>だろこゑ</sup>をあぐ  
 蟬の翅帆柱のごと立ててゆく蟻は確かな速度を持ちて  
 番なる鳥が重なる屋根の樋見尽くしがたき晩年の空  
 丈なせと実らぬピーマン今宵はも開かんとする入門書など  
 叶わぬはデンドロビウムの紫紺色ふさうは淡き振花の紅  
 いよいよに諾わんとす道端に息の喘ぎをしばし休えて  
 息切れをかこち出できしウオーキングようやく暮るるかなかなの声

## 木村文子 地球の子

・羊

どろんこの手と手を繋ぎみずたまり飛び越え あ、いま魚がいたよ  
 空の子は帰るよ海の子は海に帰るよ 晩ご飯だよ  
 手をのばし走っていくよ雲の子は大きな父さん追いかけてながら  
 湖が遼といっしょに眠る夜雲の子むくむく遊びはじめる  
 雲の子は山を静かに降りてゆく小さな雨の子三人つれて  
 海の子は地球の子ども空の子も地球の子ども あなたを守る  
 一日を遊びつかれて眠るころ地球の子らはでんぐり返りす

## 草刈十郎 終戦日

・世

真夏日の畑に面伏せただひとつ遅々とし笠の進みあるなり  
 ぼこぼこ夕立吐く樋の音絶えていきなり半端なきこの暑さ  
 蟹の動き見たび思ふ空襲に蟹のごとくに逃げしあの日々  
 ものみな濃き影引きて空蟬の欠けし墓石に爪を立てをり  
 この星に見得を切りたるごとくにもりゆうりゆうとして立つ雲の峰  
 戦争もわれも老いたる終戦日死してはならじ甦るもの  
 ただ生きてゐるだけなれどそれもよしそれだけでよし空暗れ渡る

## 國井節子 一握の砂

・春

浮草の根に産卵す緋目高の一ミリばかりの命がひかる  
 この夏の暑さに負けて茗荷の花ひとつも成らず水不足かも  
 木蔭よりふはつと飛び立つ白さきの力の限り羽ばたく音す  
 小鳥らの出したる糞より芽生えたる紫式部ぞ 色うつくしき  
 甲子園 どろんこになり戦ひし汗の結晶 一握の砂  
 聞きちがひ思ひちがひに勘ちがひ間違ふつもりはさらさらないが  
 冷蔵庫見た目はどこも悪くなしされど時々どこかがゆるむ

## 小泉 泰清

脳梗塞

・う

夕食を済まして妻に「ごちそうさま」謝して間なく奈落に落ちる顔歪み涎の垂れて一瞬に身は傾きて死の淵さ迷ふ

救急の担架にのせられ車へと運ばれかつと眼を開く

救急の車内に気付き甦りわが名問はれて舌の根もつれし

病院に到着して医師看護師寄り来ててきばき治療し呉れし

エム・アール・アイの真洞に入りて轟音に包まれ安堵の思ひ染み出づ

今年弥生、腎性貧血症に悩まされ文月脳に血の詰まるとは

## 河野 繁子

結び目

・雁

ふと時の中に入りたる子の育ち四歳児はやしゃべるにしゃべるうごかざる雲などはなし混じりては離れいずこか行く先知れず

結び目の固きをほどき放たれし風船の如くひとは逝きけり

はやく咲くキツネノカミソリ一輪に慰められて次の花待つ

季たがえ大山蓮華一つ咲く来る日も来る日も雨の八月

羽ひろげ伸びするらしき灰鷹の暮らしの見ゆる里山に生く

小さな輪描き遊ぶは何鳥かグラウンドの空に寄りては遠のく

## 小西 美智子

モネの庭

・大

モネの庭たずねし夏の匂いくる「睡蓮」の絵のまえに立つとき

睡蓮は白く咲きいて池の水青むらさきにひかりかげろう

太鼓橋みどり色なし藤の花うすむらさきに咲き下がりがたり

太鼓橋柳のみどりと溶けあいて一幅の絵となるモネの庭

浮世絵を壁いちめんに飾りいしモネの住居をしたしみて見し

望郷の思いに浮かぶモネの庭みどりの橋にたたずみたる日

睡蓮の絵に加われる一枚のいたまじきかな「柳の反映」

## 小林 能子

熊蟬

・羊

クマゼミの声シャワシャワと昼下り単調なわが耳鳴りに和し

耳底に絆めく夜の熊蟬が鳴き已まぬなりシャワシャワシャワ

踏み出だし縛るる足をふんばれば夏の光の束が目を刺す

一天俄かにかき曇りたり根岸湾ガントリークレーンは黒く動かす

落雷はわが耳鳴りをつんざきて閃光走るキツチンの窓

雷鳴の遠のきカラスが屋上に一列にゐてあたり睥睨す

カラスらを仕込みし夢のたわいなく不審のイタチ、アライグマ追ふ

## 近藤 栄昭

駒草

・福

ゴンドラを選ぶ登山は山の友老いの来たるか草津白根山

欠け砕け石尖りたる山の道堅き靴底サクサク弾く

駒草の群落赤き山砂にまぎれ咲きいる気づけば一面

草生えぬガレ場を選ぶ生う生と強き駒草山の女王と

駒草の見頃は七月二十三日草津白根へ降りるは確か

二百キロを掛け来て滞在三時間白根の駒草記憶に止める

山の友と来たるを喜ぶ今年夏明年はゆこう吾妻菊見に

## 近藤 芳仙

道東の春

・信

流水のよする海面のイメージにけふ見る四月知床のあを

五湖をめぐる高架木道 草原のいづことさがす獣らの道

奇岩つづく知床岬をおつる滝ブユニフレベはアイヌの言葉

摩周湖の霧ふきあがる剌那には水面のあをが陽をてりかへす

津別峠の暗きにみあぐる北斗七星われらも天にうく星にゐる

砂嘴とよぶ野付半島ほそながくトドマツも トドワラも骨の形骸

北国に北のしきたり娘夫婦にささへられつつ坂のぼりゆく

## 坂上直美

令和元年夏

・天

夏雲の湧き上がる中鉾は行く真幸くあれよおおやまとの国  
狭き道あまり知られぬ山の立ち泰然自若ご神体あり  
街宣車声高に過ぐ八月のうだる暑さの耐久難くして  
炎暑避け混凝土の箱の中やがて干涸び消えゆく我が  
ポストさえ遠しと思ふ炎熱の土瀝青の路人影も無し  
まだ売れぬ角の空地の雑草の丈高くして夏は過ぎゆく  
はや季節かわると見えて吹く風の涼しくもあるか八月も過ぐ

## 坂出裕子

水

・浴

過ぎゆくをひたに待つのみ体温を越ゆる猛暑の今日も続ける  
生きてゐるだけで大変 息ひそめじつと待ちをり炎暑過ぐるを  
美しき秋の紅葉のぞむべくなき枯れ色の木の葉さびしき  
沈丁花常緑の葉の黄を帯ぶる水やり足らぬ我と責めをり  
手遅れか知れないけれど弱りたる木の葉に朝に夕に水やる  
炎熱の日の夕映えのあかね雲この世のものにあらぬやさしさ  
オランダの旅に出づると聞きしより浮かぶ運河のゆたかなる水

## 佐久間 晟

日乗(二七)

・滝

老い二人朝を静かに目覚めては語り少なき今日がはじまる  
他愛無き語りに今日も和み合う二人の生きのいつ迄続く  
静けさも生きの名残りかこの宵も言葉少なく眠りに付けり  
いとしさも歳古ればなお深みゆき見つめるのみの愛のことぶれ  
この妻が今もし無ければ何とせん灯りも点けず物をも語らず  
こんな事思ふもいとわし暗く暗く沈みゆくこの世の果ては悲しき  
もつとつと楽しまんかな残り少なきこの人生ならば妻と二人で

## 椎名恒治

声

・橋

取り込みし毛布にひそみぬし蟬か突如耳もとに声をあく  
遠く住む老いたるはらからの亡きを知らず留守電を聞く再現をして  
ワイプロの操作を忘れのろのろと文字を探すわが老いし指  
あの世はわれになしと言ひきりし彼の言葉忘れざり亡き後を  
ベッドより頭をあげて何か言ふ声なけれども聞きたる如し  
氷雨降る二月七日なりき何年経たりや指折りてみつ  
病院のベッドの上に置きたる古りし手帖にわれのみの知る数字

## 鈴木結志

顔真卿展(四)

・福

書き出しは冷静顔真卿の書の燕尾のはらいやいばのごとし  
ひたむきな筆致澄みきる最澄の書の純粹に惚ぶ人柄  
行草の交じる筆致の巧みなる嵯峨天皇の筆に手習う  
歐陽詢自ら生みし「極則」の醜銘泉の書凜として映ゆ  
王羲之の書法を継ぎし草書とう孫過庭の書今に慕わる  
聖武天皇筆とう大聖武古筆手鑑として今に息づく  
善光寺蔵聖徳太子の掛け軸の聖書ひたすら目にきざみこむ

## 関根榮子

伊勢火花

・埒

草はらの茂るにまかす暑の日々に虫捕りの子等をこの夏は見ず  
田園を全き半円に虹架かる朝の虹は雨になるとう  
開けしまま寝ねし窓より冷風の吹き入り目覚む雨となりいつ  
どのように種子飛び来しや思わざる門扉のもとに伊勢火花咲く  
伊勢火花咲ききりて赤く細かなる種子を散らせば線香火花  
この夏の小さな異変は油蟬鳴かざるうちに法師蟬鳴く  
取り残すゴーヤの熟れて花のごと開きて真赤き種子をさらせる

## 関根和美 回転

夫頼みの通院の身を愚痴ひとつなく半年を支えくれにき  
 右手首不十分なる回転の技と心得ハンドルさばく  
 グレゴリオ聖歌のCD久々の運転車中に堂々と流す  
 テレサ・テン聴けば天安門思いじわりとにじむ香港の今  
 早々と刈られし稲田のなつかしきわらの匂いが車窓に入り来  
 登利平の烏めし旨しああこんなことなら想定外もまたよし  
 初めての長崎と告げ旅立ちし友よ今日もどししゃぶりの報

## 久我田鶴子 はづすはづれる

でたらめに泥をつかみてなるかたちおのづと宿るいのちのごとき  
 代々のいとなみを継ぎ作る人形 通過点なるおのれを言へり  
 守るべきへわたくし) なんてあるものか踊れば笑ひこみあけてくる  
 面つけてはづれゆくものヒトもまた一匹なるが身体を満たす  
 ポンと手を打つ一瞬に潰されし(へわたくし)が見ゆ 笑つてしまふ  
 吐く息とともに発する声高く鹿踊りだちやいこの人はもう  
 古き家に独り黙つて人形の絵付けしてゐたついきさつまで

## ■石のうた■

磔として用ひられしか拾ひあぐる

小石は朝の冷えを満たせり

小野茂樹『羊雲離散』

## 香川進の生きものの歌 13 田土成彦

・さくら花咲ききはまりてしづかなり遠き毛原にあをじ鳴き  
 そむ 奈良県川添村毛原 智龍公園第十二歌碑

毛原は奈良県の県央の静かな村で、以前は近鉄「榛原」から  
 数便のバスがあったが、現在ではどうなのだろう。毛原出身で  
 春日グループの長であった辻治氏の墓碑が長久寺境内にあり、  
 「ゆめ遠くわれ雲追いぬ何がなしわが戀うるさとは青き空なり」  
 の歌がそれに刻まれている。これに対面する形で近くの小高い  
 丘の上に香川進の歌碑が辻彌生さんの発起で建立された。昭和  
 六十三年四月十七日のことである。除幕式に参加させてもらっ  
 たが、当日は桜の花の盛りの頃であったと思う。

また、辻治氏は日本野鳥の会の重鎮であり、野鳥撮影の苦勞  
 などを生前話されていたのを思い出す。それに因んで鳥の歌が  
 詠われたのだが、辻彌生さんに渡された歌稿には鳥の名前の部  
 分が空白になっており、彌生さんに好きな鳥名を入れるように  
 との指示があったという。彌生さんは「あをじ」というあまり  
 ポピュラーではない鳥を選ばれたが、香川進はその鳥名をよし  
 としたという。歌意は極めてわかりやすく毛原魔寺をようした  
 一帯の閑雅な農村風景と魔寺にまつわる歴史的な時間の悠久を  
 捕らえ、鶺鴒の鳴き声によってそれを現実に取り戻している。  
 鶺鴒は目の周りからくちばしにかけては黒く、「いぶし銀」の  
 男らしい顔つきが特徴的とネットに載っていた。鳴き声も美し  
 いという。



## 宮柁二と香川進

久我田鶴子

コスモスに所属する方から、五十年ほど前の「コスモス」に掲載された香川進の文章のコピーを送っていただいた。「漆黒の帽」と題した、宮柁二のことを書いた文章である。短いもので、全文を書き写す。

かれも、わたくしたちとおなじく、かわいた軍靴をはいていた。雑ノウを肩から、わきはらにして。——かれの服装が、すこし違っていたのは、漆黒の帽を、ふかぶかと、かむつてゐることであつた。歌壇はまだ、近藤、大野の時代であり、そのころすでに、柁二をたかくみていたひとびとは、名を没してしまつた。

かれは、人間論的なたちばにおいて、内面をながれる清いものを、その稟質の、省察性において、覗きなおそうとしていたのではないか。わたくしは、この時期のかれと、いく夜、みだれ狂つてゐるときほど、柁二にひそむ、ディアレクティクなものをうけとめたことはない。それは、いまいわれてゐる「孤独」というような、ありきたりの、概念的なものではなかつた。

「暗いほうへ歩こう」そういつて、「電車道」を、かれは、

「土橋」のほうへゆくのであつた。

この独特の文体は香川進のものだ。ひらがな書きが多く、読点も多い。掲載は、「コスモス」昭和四十五年五月号。昭和四十五年五月と言へば、小野茂樹が事故死した月である。原稿は、それより前、三月ごろに書かれたものか。香川進は、六十歳。

戦後まもなくの、昭和二十五年前後を思い起こしているようだ。この頃、同世代の中で最も交流があつたのが宮柁二だつたのではないだろうか。『山西省』の出版会も、香川宅で開かれている。昭和二十四年十月九日、釈道空・前田夕暮・前田透・葛原繁・高木一夫・千勝重次・岡野弘彦らが集つた。

取っ組み合いの喧嘩をしたようなこともあつたようだが、歌人として、また、人間として、香川進は宮柁二に深く信を置いていたと思う。北原白秋に見込まれた宮柁二に対して、自分もかつて前田夕暮に見込まれたという意識もあつたかもしれない。中隊長と一兵卒という違いはあつたが、大陸での戦争体験をもつという共通項もあつた。「孤独派宣言」をした宮柁二とは別の歩み方をしたが、自らの内面を覗きなおそうとする宮を、「暗いほうへ歩こう」と言つた宮を、好ましく思つて見ていたにちがいない。おそらく、根本において相通するものがあつたのではないだろうか。

昭和二十六年四月二十日、前田夕暮が没する。その臨終の場でも、香川進の傍らには宮柁二がいた。『氷原』には、その時の宮柁二を詠んだ歌がある。

・死にてより御身體みかみちひさくなりたるとわれに語りて宮柁二  
かなし

## 今日の二人

### 外へ内へ 上原ケイ子

荒海の果てに辿りしささやかな安らぎの空に歌う「やしの実」  
 台風風の吹き荒れしハネムーンのあれから四十八年再びの北海道  
 山ひとつ越して嫁したる町はずれ隠れ念仏の里ひっそりと  
 山ひとつ越せば大きくなる仏壇読経もならぬ身の小ささよ  
 二歳より二人の姉とやって来た奏くんのピアノ「金色のトランペット」  
 岡山の白桃届くまるまるの豊かな実り奏くんの音  
 あかつきの山鳩のやさやけきに今日の一日歌に始まる  
 コーラスのくねくね揺らしメンバーの介護疲れにより添う真夏  
 どの歌より心重ねる「愛の夢」君のハミング耳にやさしき  
 夏を咲くききょうの花か休み無き予選本選の夏ゆかんとす  
 上の字を名前に書きし来し方の三角形の座り心地よ  
 群青の充電の夏去りゆけばネジ締め直す仕事始め  
 坊主頭の父の髪がクルクルに吾のルーツの見えし還暦

#### 紙芝居

私が生まれ育った寺、西本願寺派、外所  
 山西教寺に子供向けの紙芝居があった。  
 「くもの糸」だ。他にあったかもしれない  
 が覚えていない。芥川龍之介の有名なお話。  
 「お釈迦様はあんな所にはいません」僧侶  
 が言う。「くもの糸が人間を引っ張り上げ  
 る空想物語なんだから何でも有りでしょう」  
 ある日の会話。

私のこれまでの人生で「もう無理！」  
 「これ以上出来ない！」と叫びたい状況が  
 何度かあった。でも現実がその一言でぶつ  
 んと音を立てて消えてしまいそうで声をあ  
 げられないで来た。

今、古希を過ぎる年となり、何かに護ら  
 れていると感ずる時、ふとこの「くもの糸」  
 を思い出す。舜草介先生の短歌との出会い、  
 そしてその後を引き継ぎ御指導下さってい  
 る竹下妙子先生。ひとえに感謝の気持ちで  
 一杯だ。導かれるままに縋りついてきた  
 と思う。

これから先、もっと叫び声をあげたくな  
 る状況になるのだろうか。

歌を歌う時、あやつり人形のようになれ  
 といわれる。上からつられたりぶら下がっ  
 たり、私の上には一本の「くもの糸」がある。

## 今月の二人

### 出会ふ幸と不幸

坂本佐和子

回天に入る日いくさは終はりけり九十二翁しづかにかたる  
 殴られて痛さはつづく特攻兵それ戦場ぞ救ひいづこに  
 兵殺めいちめ抜きにし上官は戦ひ終はるや逃げかくれけり  
 特攻を強ふる国家とは何ものぞ若きを地獄に送りぬくとは  
 回天と海底に生きるたましひのまことの声は遺書に残らじ  
 死ぬための回天基地なる大津島猛訓練のちはかなしみ  
 若きらが生きるを捨てて弾と化す訓練の海蒼くしづもる  
 ひたすらに神に祈りて世に尽くす元特攻兵はわれの鑑ぞ  
 わが生れし街の見えきぬ車中にて父よ母よとなみだあふるる  
 紅白の金紗に鶴舞ふ祝ひ着のわれの写真にその街名あり  
 祝ひ日にわれの子孫も纏ひたり恩愛こもる鶴舞ふ晴れ着  
 父逝きし街のあたりを過ぐるときかなしみ湧きて苦し東京  
 わがこころ育て給ひし大学の恩師も逝きし東京の街

老而好学

回天は「天を回らし戦局を逆転させる」兵器として開発された。大量の爆薬を搭載した魚雷に一人乗って操縦し、敵艦に体当たりする特攻兵器だ。脱出装置も通信装置もなく一度母艦を離れば事の成否に係らず生還できない。呉海軍工廠で黒木博士少佐、仁科閔夫大尉が考案。一九四四年十一月、菊水隊が周南市大津島から出撃。続いて金剛、千早、神武、多々良、天武、振武、多聞、神州の順に西南太平洋に出撃。連合艦隊消滅後の日本海軍唯一の艦隊として奮戦した。この作戦で原子爆弾を運んだ重巡洋艦「インディアナポリス」をレイテ沖で撃沈した。回天戦没者一二九名。私は十年前の七月、大津島を訪ねた。回天記念館で搭乗員の遺品や回天の原寸大模型を見学、当時の歴史や生活等の説明を受けた。その時、黒木少佐や搭乗員一人ひとりのこれほどの優秀な頭脳と人柄を南溟の海に散らす、敗戦後の日本にこそ使命があったと悲憤慷慨し死を悼んだ。回天操縦には一人六役の手が要る。さて、短歌は八十三歳で始め、高津砂千子師の温情あふれる薫陶に感謝のみ。東京へは娘のくれた米寿祝で旅をした。

## ◆今月の二人・上原ケイ子品評◆

## 三角形の座り心地

上原さんは、宮崎県三股町<sup>ミマタ</sup>在住。鹿児島県に近い、県南に位置する。ご実家は、お寺だったらしい。

・荒海の果てに辿りしささやかな安らぎの空に歌う「やしの実」  
一連の始まりの歌。「やしの実」の歌を歌いつつ、自らの辿ってきた人生を振り返っている。

・山ひとつ越して嫁したる町はずれ隠れ念仏の里ひっそりと  
嫁いで来た此処。山ひとつ隔てた所は、生まれ育った所とは全く違っていったようだ。町はずれには、隠れ念仏の里がひっそりとあって……と。山深い里の歴史や暮らしの一端が窺える。

・コーラスのくねくね揺らしメンバーの介護疲れにより添う真夏

上原さんは短歌だけでなく、コーラスもしているらしい。「コーラスのくねくね揺らし」とは、何だろう。歌う前のリラック運動か、歌に合わせて皆で身体を揺らすのか。メンバーの中には介護疲れの人もいる。仲間への労りが、身体を揺らすときにも自ずと寄り添うようなかたちになる。

・上の字を名前に書きし来し方の三角形の座り心地よ  
嫁して「上原」となり、何度その名前を書いてきたことか。「上」の字は、確かに三角形だ。その「三角形の座り心地」とは、面白い。安定していて、悪くなさそうだ。

・坊主頭の父の髪がクルクルに吾のルーツの見えし還暦

何の拍子だったのか、坊主頭しか見てこなかった父の頭に癖毛を見たのは、上原さんの髪の毛も癖毛なのだろう。ここにルーツがあったのかという驚き。思わず笑ってしまった。

## ◆今月の二人・坂本佐和子品評◆

## まことの声は遺書に残らじ

評者・久我田鶴子

坂本さんは岡山市在住。八十三歳で短歌を始め、今年米寿を迎えるという。青春時代に戦争があった、私の母と同世代だ。

・回天に入る日いくさは終はりけり九十二翁しづかにかたる  
人間魚雷「回天」に入る日に戦争が終わり、辛くも生き残ったのだと語る九十二歳になった男。その話に、じっと耳を傾ける作者。翁の語りの静かさが、いっそう生々しく心に響いたのではなかったか。回天に「乗る」のではなく「入る」と言うのが、入ったらもう生きては出られないという感じを伝えてくる。坂本さんは、大津島の回天記念館を訪れたという。

・回天と海底に生きるたましひのまことの声は遺書に残らじ  
回天とともに海底に沈んだ「たましひ」。その前に書いた

(書かされた?) 遺書には、「まことの声」は残っていない。その口惜しさが、「まことの声」に向かう。声を聞こうとさせる。

・紅白の金紗に鶴舞ふ祝ひ着のわれの写真にその街名あり

一連の後半では、自らの生まれた街を訪れ、そこにいた日々、父母や師のことを振り返っている。この歌は、昔のアルバムでも見ているのだろうか。金紗に鶴の祝い着は、七五三の着物か。娘のために調べてくれた親たちの思いが伝わる。結句「その街名あり」は、前の歌から「わが生れし街」と分かるが、この一首だけでは分からない。地名が具体的にいった方が良かった。

・父逝きし街のあたりを過るときかなしみ湧きて苦し東京

結句の「苦し東京」は、こう言うしかないというストレートな迫り方だ。父はどんな亡くなり方をしたのか、そこにも戦争が絡んでいたのか。坂本さんの「東京」をもっと知りたい。

私と短歌との出会いは幼い頃に始まりま  
す。正月、母の実家では百人一首のかるた  
取りが行われていました。母がなくなり遺  
品の中の手帳に数々の歌が記されてありま  
した。それらの歌は深く心に響くものが多  
く、母が存命中にこの手帳を見せてもらっ  
ていたら、母と一緒に短歌についていろい  
ろな話ができただろう、と残念に思ってい  
ます。

母が亡くなった年、昭和五十六年、郡山  
市民学校短歌講座を受講しました。講師は  
前田はるゑ先生でした。ひととおり講座が  
終了した後、受講生が前田先生にお願  
いして引き続き指導を受けることになり、こ  
こに会員十七名の「たまゆら短歌会」が結成  
されました。

・亡き母にあやかりたしとこの我も  
てほどきを受く歌の心を

これは私が初めて詠んだ歌です。前田先  
生が亡くなられた後、小池和子先生、佐藤  
美枝子先生に講師をお願いし、「たまゆら  
短歌会」の活動を続けました。私が、昭和  
五十八年に「地中海」に入会してから詠ん  
だ歌はいつのまにか二千首を超え、平成二  
十二年、佐藤先生の指導や家族の勧めもあ  
り、歌集『絆深めて』を出版することがで  
きました。その後、一年もしないうちに東

日本大震災という想定外の災難が起こりま  
した。「たまゆら」の会員のことが気にな  
りましたが、皆さん無事で何よりでした。  
しかし、活動の場であった中央公民館が使  
えなくなり、例会で集まる場所の確保に苦  
劳しました。また、大震災の後に起こった  
原発事故の影響による心労ははかり知れな  
いものでした。このような時期に「玉響」



第三十集記念号が発刊できるかどうか不安  
な状態でした。会員の皆さんに詠草を提出  
することをお願いしたところ、皆さん一致  
協力し詠草をまとめてくれました。思い起  
こせば、前田先生の勧めで創刊号を発刊す  
ることになった時に、一年間の歩みを作成  
し、記録として残すことが大切ですが、こ  
指導をいただきました。「玉響」には必ず

一年間の歩みを載せています。こうして、  
大震災に遭遇しながらも、平成二十四年、  
「玉響」第三十集記念号を発刊できたこと  
は会員一同大きな喜びでした。これを区切  
りとして、たまゆら短歌会は活動を終えま  
した。

平成二十七年には、歌集『絆深めて』に  
掲載できなかった歌と地中海に掲載された  
歌の中から、久我田鶴子さん、横田敏子さ  
んのご指導を受けて、第二歌集『架け橋に』  
を出版することができました。歌を詠み続  
け、令和元年五月には、福島県歌人会定期  
総会において優秀作品の表彰を受けました。  
今野金哉会長は新たな元号「令和」の出典  
が万葉集と聞き嬉しく思っている、活動を  
活発化していきたい、と挨拶されました。  
短歌をとおして学んだことは数多くあり  
ます。時代が令和になっても、物事をよく  
見つめること、よく考え心に感ずることが  
大切だと思います。

・子や孫が希望を持ちて励むさま  
生き甲斐として「令和」を迎う

これまでご指導いただいた先生方や一緒  
に活動した仲間感謝するとともに、これ  
から先も歌を詠む心を失わないように日々  
を過ごしていきたいと思っています。